

季刊 ゆるる



認定特定非営利活動法人
杜の伝言板ゆるる

2023年・夏号



「自分」が言いたいこと、「相手」が受け取ること

石田 祐（杜の伝言板ゆるる代表理事／関西学院大学人間福祉学部）

普段の会話にしても発表や助成金の申請書にしても、『自分が』何を伝えたいかが大事」という指摘がよくなされます。そのためには、自分が何を伝えたいかのメッセージをはっきりさせておくことや、その伝えたいことの背景や理由がしっかりと認識できていることが重要です。

一方、『相手に』何が伝わるか」という視点を持つことも重要です。言うに易しですが、難しいことでもあります。自分としては相手に伝えたはずなのに、実際の相手の行動を見ると自分が伝えた通りになっていなかった、という経験をみなさんがお持ちではないでしょうか。

しかし、相手は自分とは違う人間です。もっと言えば、相手の関心は自分の関心とは異なります。やはり

経験があると思いますが、人は自分の関心のあるところを特に記憶したり、取り込んだりします。したがって、相手に何が伝わるかは相手の気持ちや理解次第となります。テクニカルに考えれば、例えば助成金の申請書であれば、資金の出し手が求めていることや関心事に合わせて自分のメッセージを出すこともできます。

視点を変えると、自分が伝えたいとおりに伝わるとは限りません。また、「忘却曲線」という理論で説明がなされるように、翌日には7割程度のことが忘れられてしまいます。

さて、みなさんの団体では、助成金の申請書にしても、ボランティアのみなさんへの説明にしても、自分たちの活動をどのように理解し、記憶してもらっているでしょうか。

目次

- 「自分」が言いたいこと、「相手」が受け取ること 石田 祐 (1)
- コロナ禍にNPOが見せた14の動き - 39カ国・地域の調査から 岡田 彩 (2)
- みやぎNPOプラザ2023夏 緊急事態大発生! 堀川 晴代 (3)
- ジェネラティブティ：NPOの世代承継をうまく進めるために必要なこと 高浦 康有 (4-5)
- 事務局よりイベントのお知らせ：「宮城県の助成プログラム×NPO～資金と想いの好循環～」(5)
- 気分や体調を口に出すことで、気づくこともありそうです 熊谷 智美 (6)
- それぞれの地図を 波多野 卓司 (7)
- 「共酒」 真壁 さおり (8)



コロナ禍に NPO が見せた 14 の動き – 39 カ国・地域の調査から

岡田 彩 (東北大学大学院情報科学研究科/杜の伝言板ゆるる副代表理事)

前触れなくやってくる緊急事態や危機に対し、NPO は何ができるのか。言うまでもなく、日本では、地震や大雨をはじめとする自然災害への対応について、多くの知見が蓄積され、その経験と教訓が次の災害時に生かされてきました。

感染症の蔓延もまた、NPO がその力を発揮し得る危機の一つと考えられます。特に、局地的な蔓延ではなく、社会の大部分が影響を受けるような場合、地域で活躍する NPO の力は、緊急事態に対応する上で不可欠です。感染症の蔓延という危機の中で、NPO には何ができただのか。何ができ得るのか。2019 年末から始まったコロナ禍を振りかえり、次の危機に立ち向かうための知見や教訓を導く研究が多く進められています。

今回は、39 の国・地域の経験から、NPO が見せた動きの網羅的な把握を試みた 2023 年 6 月出版の最新論文をご紹介します。米国とオランダの研究者が、各国・地域の専門家にインタビューを行い、パンデミックのはじまりから 1 年半の期間に NPO が行った活動を聞き取っています。

調査の結果、表にまとめた 14 の動きが明らかとなりました。ざっと見ただけでも、NPO というユニークな立場の組織が、感染症の蔓延という危機に際して行い得る活動の「幅の広さ」が見て取れるのではないのでしょうか。もちろん、14 の活動は、国や地域の事情によって異なります。政府の体制や政策によっては、NPO として容易に着手しにくい活動もあれば、逆に NPO だからこそ重視すべき活動もあります。その事情は様々です。

しかし、次の危機に備えるという観点から、この表は「そうか、NPO はこうした活動もでき得るのか」というヒントを得る上で、とても重要な材料になると考えます。NPO の立場にとっては、「そうか、そういう動きもできるかもしれない」という気づきにつながります。市民ひとりひとりにとっても、感染症という危

機の際に、NPO という存在に何を期待するのかを考える素材にできそうです。日本では、子ども食堂やフードバンクを通じた食糧の提供や、一斉休校時の学習支援などが、目立って報道されたでしょうか。NPO という立場を活かして政府や企業の協働を促すことや、弱い立場の人々の声を訴えるアドボカシーなどは、今以上に行う余地があるのかもしれませんが。

次なる危機に、いかに備えるか。こうした地道なふりかえりの作業が、未来の NPO の助けになっていくことを願っています。

《紹介した論文》 Garcia, S., Carrigan, C. and Wiekking, P. (2023). Global Civil Society Response to the COVID-19 Crisis. *Voluntas*, Online First.

活動の内容	内容の詳細	活動が観察された国・地域の数
弱い立場にある層・高リスク層への社会的な支援	高齢者、障がい者、路上生活者、失業者、難民等に対する食糧配布、経済的支援、育児支援など	35 カ国
医療・健康管理のニーズに対応	医療サービスの提供、医療従事者の支援、医療用品（防護服等）の提供、心理的なサポートの提供	30 カ国
政府、企業、その他組織、ボランティアのコーディネーション・協働	ボランティアを募る、病院と寄付者をつなぐ、行政と協力してワクチン接種を呼びかける、など	27 カ国
資金調達	クラウドファンディング等を活用し、社会的なニーズに対応するための資源を確保	21 カ国
誤った情報との戦い	誤った情報や風評被害に対する意識喚起や情報の訂正	16 カ国
アドボカシー	移動制限やワクチン接種をめぐる人権の保障、弱い立場にある層・高リスク層のニーズを訴える	10 カ国
学習支援	家庭での学習、オンラインでの学習のサポート	10 カ国
地域の公共サービスを支援	ゴミ廃棄、交通、清潔な水の確保など	9 カ国
他の NPO のサポート	クラウドファンディングを活用した資金調達の支援など	8 カ国
データの整備と共有、データトラッキング	IT を駆使し、必要とされている事柄に関するデータを収集し、支援が届くようにする	7 カ国
小規模ビジネス経営の支援	(論文中に詳細な説明なし)	4 カ国
ドメスティック・バイオレンスの予防・対応	(論文中に詳細な説明なし)	3 カ国
接触者追跡のサポート	(論文中に詳細な説明なし)	1 カ国
初期対応者 (first responders) のサポート	医療従事者、警察などのサポート	1 カ国



みやぎ NPO プラザ 2023 夏 緊急事態大発生！

堀川 晴代 (みやぎ NPO プラザ館長／杜の伝言板ゆるる常務理事)

この夏は様々なことがありました。7月5日には施設内の電話やインターネット回線が突然つながらなくなる事態が発生。今は故障確認や修繕を依頼しようにも、いろいろな段階を踏まなければならず、通信回線の早急な復旧が非常に難しいことを知りました。結局、翌日の夕方ようやく復旧。原因は、電柱から敷地内に光回線を引き込むところが虫に食われていたこと、とのこと。…回線を食べる虫って…？と思いながらも、復旧に安堵したのでした。

7月28日は朝から建物全体が停電に。まもなく利用者が来館する状況での発覚です。館内はかなり蒸し暑く、閉館しかないか…？と思いながら利用団体に状況を連絡。「もうすでに向かっています」との返事があり対応を思案するなかで、なんとか開館時間前に復旧しました。原因は、電気設備が何らかの小動物の影響による異常を感知したこと、とのこと。…小動物って…？とその理由に脱力したのでした。

その翌日。今度は水が止まりました。お昼過ぎころから水の出が悪くなり、あれよあれよという間に水道もトイレも水が出なくなっていました。奇しくも土曜日で庁舎管理者はお休み。緊急事態のため電話で指示をもらいながら、業者に復旧を依頼しました。その後2時間ほどで水が出るようになりましたが、その間、利用者の皆さんには榴岡公園の公衆トイレを案内。原因は前日の停電の影響で、浄水がタンクに汲み上げられなかったことでした。

施設を管理していると、思いもかけないような様々なことが起こります。素人には対応できない部分に不具合が生じてしまうと、復旧に時間がかかることもしばしばです。

その間、利用者の皆さんには大変なご迷惑とご不便をおかけしてしまいます。ですが、NPO プラザの利用者の皆さんは、クレームをつけるわけでも急かすわけでもなく、辛抱強く待ってくださるので、本当にあり

がたいです。

これらの不具合は、施設の老朽化による部分が大いのだと思います。なんとといっても築50年以上。そしてNPO プラザが開館して22年。これまでと同じように使うのが難しくなったと日々感じます。

NPO プラザは、令和10年度に現在地から1kmほど東の仙台医療センター跡地に、宮城県民会館との複合施設として新築移転することが決まっています。それまでは、この施設を丁寧に大切に使用していきたいと思っています。

そして、新施設もNPOの皆さんが使いやすく、NPOを身近に感じられるようにすることが欠かせません。7月に基本設計と管理運用方針が公開されたので、ぜひご覧ください。皆さまのご意見やご要望をお待ちしています。

基本設計と管理運用方針の
詳細・ご意見はこちら ▶



▲ 宮城県民会館・宮城県民間非営利活動プラザ複合施設
基本設計概要版より、外観イメージ



NPO を取り巻く経営環境⑩

「ジェネラティビティ：NPO の世代承継をうまく進めるために必要なこと」

高浦 康有（東北大学大学院経済学研究科／杜の伝言板ゆるる理事）

人は残りの人生が少なくなってくると、次の世代に自分が経験してきたことを伝え、より良い方向に導きケアしていきたいと思うものです。こうした次世代への関心は「ジェネラティビティ（Generativity：世代性、世代継承性）」と呼ばれ、中高年期特有の心理的発達とされています。

「ジェネラティビティ」という言葉は、ドイツ生まれの精神分析家エリク・エリクソン（1950）の造語で、ジェネレーション（世代、生成の意）から派生し「次世代を導き確立することへの関心」と定義づけられています。単に生殖の観点のみならず、技術的、文化的にも広く次世代を育て世話するという観点が含まれています。

ではこうした動機はなぜ生まれてくるのでしょうか。中高年期にとって、これまでの経験や持てる知恵・技術を活かし、次世代への関わりを通じて、自分自身の命が次へと受け継がれていくことを実感でき、やがて訪れる自分の死を受け入れることができるようになるかとされています（Erikson 1982, 田淵 2018）。

ライフサイクルの心理学で用いられてきたこのジェネラティビティの概念は近年、企業の事業継承の研究などにおいても注目されています。たとえば、先代の社長が個人的利害を超えて次の世代に経営を引き継がせようとする際の基本動機として説明することができます。一方で NPO においても設立されて 20 年、30 年が経つような組織が出てきている中で、事業を次の世代にどのように託すか、というのが問われるようになっていきます。

NPO の創設当初のリーダーが次の代にバトンタッチする際、コミュニティのために引き続き自分の立ち上げた組織が役に立ち続けることを望む場合がほとんどでしょう。それは利他的な精神に根差したものと言えます。しかしこの時、NPO のリーダーが、後継者を育

てようと熱心になる余り、自分の思いや流儀を押し付けてしまっただけでは、かえって次の代から反発を招くことになるでしょう。

もしこうした事態に至れば、事業がうまく継承されずジェネラティビティの発揮が妨げられてしまいそうです。実際、高齢者が若者相手にとって良かれと思ってとった行動が、行動の受け手である若者から評価されず、本人自身が相手から「受け入れられた」あるいは「感謝された」と感じられていないようであれば、ジェネラティビティの低減につながることで、さらには高齢者の次世代に対する関わり行動が長期的に低減することが報告されています（田淵 2018）。

ジェネラティビティの側面からのリーダーの心理的成長には、後の代との良好な相互作用が欠かせないということが確かに伺えます。

NPO のリーダーは次の世代とじっくり対話し、彼らの考え方や行動を理解しようと務め、次の時代に合った形の組織にしていかななくてはなりません。もちろん、組織のミッションや大切にしてきた価値については譲れないものがあるでしょうから、その点合意形成を進めることも重要です。

仮にジェネラティビティが低減し、リーダーが敗北感をもって組織を去り関係が途絶えると、リーダーが有していた経験やノウハウが十分に活かされず、組織基盤の弱体化にもつながりかねません。

NPO が世代をまたがって存続を図っていくのは、それだけ地域に根差し、ステークホルダーからの厚い信頼と支援があればこそと思います。「長寿 NPO」への新たなステージに向けて、いずれの NPO においても、世代承継がうまくなされていくことを期待したいと思います。

<参考文献>

Erikson, E. H. (1950) Childhood and society . New York: W. W. Norton & Company.

Erikson, E. T. (1982) The life cycle completed. A review . New York: W. W. Norton & Company.

田淵恵『『老い』と次世代を支える心』日本心理学会『心理学ワールド』82号、2018年7月

<https://psych.or.jp/publication/world082/pw06/>



Information

法人事務局よりイベントのお知らせ

○ 宮城県の助成プログラム× NPO ～資金と想いの好循環～

杜の伝言板ゆるるでは、宮城県の NPO と助成団体を繋ぐイベントを会場とオンラインのハイブリッドで開催いたします。宮城県内の NPO 活動へ助成を行っている 5 団体にご登壇いただき、NPO との相互理解を目指します。NPO にとっては、資金に込められた想いや出し手のねらいを直接伺える貴重な機会です。「獲得した助成金を団体の長期的な活動へ活かしたい」、「助成財団と顔の見える関係を築きたい」と考えている団体様はぜひご参加ください。

■ 日時

10月13日(金) 14:00～17:00

■ 会場

みやぎ NPO プラザ 交流サロン および オンライン

■ 対象者

NPO 活動に取り組む団体、NPO 支援団体、助成・補助金提供元等

■ 定員：40名(会場) 50名(オンライン)

■ プログラム

(1) 基調講演 ※オンライン登壇

助成金や支援性の資金の活用などについて
お話しいただきます。

公益財団法人日本非営利組織評価センター
業務執行理事 山田 泰久 氏

(2) 助成プログラムの紹介

○登壇団体 ※予定

一般財団法人 愛知揆一福祉振興会 様

真如苑 様

東北労働金庫 様

社会福祉法人宮城県共同募金会 赤い羽根共同募金 様

みやぎ生活協同組合 生活文化部 様

(3) 質疑応答

(4) 交流(名刺交換等) ※会場のみ

■ 後援：宮城県、仙台市

■ お申込

右 QR コードから▶



自分を大切に幸せの波紋を広げるためのコーナー⑩ 気分や体調を口に出すことで、気づくこともありそうです



熊谷 智美（フリーランス：ワークショップ講師、ライター、MC、イベントディレクター、産業カウンセラー／杜の伝言板ゆるる理事）

前号で「一日のはじまりに、その日の自分の体調や気分を確認してみましょう」という提案をしました。今号では、実施するなかでの気づきをお伝えします。

■練習が必要かも

「自分のことだから確認しなくてもわかるよ」と思っている人もいますし、実際わかるのだと思います。それでも、意識する練習をすることで、より深く気づいたり、瞬時に言語化できるようになります。ということ、このワークを複数回経験している人が、手短かに的確な言葉で自分の状態を表現できるようになることから実感しています。はじめて参加した人などは、ふんわりと当り障りのない回答をしたり、とりあえず「元気です!」と答えがちというのもよくあることです。もちろん元気なのはいいのですが、本当にそうでしょうか。

大学の特別講義でも、さらっと「元気です」と答えてくれる学生さんが多いのですが、後から「あ、でも、ちょっと調子悪いです」と付け加えてくれる人もいました。答えてからも、真摯に自分と向き合ってくれたんだなど、嬉しく思ってしまう。

■安心安全な場

ワークショップを行う際に、心理的に安心安全な場をつくるのが大切というのは皆さんご存じの通りです。気負いなくのびのびと参加できる安心安全な空間では、前述の学生さんのように、反射的に「元気です」と言ったとしても、きちんと自分を振り返って言語化できるようになります。

では、安心できる場とはどのようなものなのでしょうか。いろいろありますが、まずは「何を話してもいい」という雰囲気をつくること。冒頭に「この時間のなかで話したこと、聞いたことは、この時間が終わったら誰

にも言わないという約束をしましょう」と伝えることも方法の一つです。

あわせて、講師あるいはファシリテーターである自分から口火を切ること。私の場合は、具体的に率直に自分のことを伝えるようにしています。講師だからといってカッコつけても仕方ないと思っているので、「腰が痛くてちょっと辛いけど、心は元気です」とか、「たっぷり眠ったから、すごく元気です」とか、「イラっとすることがあって心が揺れているけど、頑張ろうという気持ちになっています」とか。

プライベートをさらけ出す必要はないのですが、具体的にわかりやすく伝えることが、はじめて参加する人の参考にもなります。

■普通ってナニ?

このワークをすると、「普通です」と言う人がいることがあります。そんなときには「あなたの普通がよくわからないので、もう少し詳しく教えてください」とお願いします。「普通」は人それぞれです。あなたが普通であるというのは、どのような状態、体調、気分なのでしょう。

○おまけ

私のワークでは、発表してもらったことを顔絵文字でホワイトボードに記すのですが、書記は参加者にお願いすることが多いです。立候補を募ることもありますが、たいていじゃんけんで決めます。

細かいことですが、私はじゃんけんの**勝者**に書記をしてもらいます。負けた人と罰ゲームのようで嫌な感じがしますが、勝った人にお願いすると、ポジティブな気持ちで前に出てきてくれることが多いです。

安心安全な場づくりには、このような小さな工夫をすることも大切だと思います。



それぞれの地図を

波多野 卓司（経営コンサルティング波多野事務所／社の伝言板ゆるる理事）

『セミナーを聞いたりアドバイスを受けていたりしていると手足が冷たくなってくるんです』

相談者のSさんが、ある時、そう言いました。

『えっ』と驚いて、どんなセミナーを聞いたのか、どんな人に相談したのかと、聞くとも無く聞いていると、それは私も見知っている人たちで、実績も豊富で、なによりとてもあたたかな印象の人たちでした。なのに、なぜそうなるのでしょうか。

それはおそらく、こういうことではないか。

『何かを得る、何かを求める、世の中に貢献する、どんどん広げる、さらにもっと貢献する、ポジティブに、オンリーワンに』

事業の世界では、やはりそれらが問われます。だから、その前提でアドバイスするのが相談を受けた人の基本スタンスであり、相談者に対して「話すこと」「見られること」「手に入れること」「知ってもらうこと」の大切さを、全力でアドバイスしようとしています。

それらをあえて一括りの言葉にすれば、『この人生で、何を成し遂げ、何を残していけるか』という視点と言えるかもしれません。それは決して間違いではないでしょう。

けれど、Sさんの心のうちには、それとは違うこんな思いがあります。

『人生は、何かを得なければいけないのでしょうか、何かを求めるべきものなのでしょうか』『貢献しなければならないのでしょうか、広げることだけでいいのでしょうか』

言い換えるとそれは、「聴くこと」「見つめること」「捨てること」「知ること」を大切にしたいという、そんなことばかり。

『これじゃあ苦勞するなあ…』とは思いますが、それがSさんの望みなのだから、それでいいのでしょうか。だから、そこから始めていけばいい。

『死ぬまでに人生に爪痕を残したいのではなく、死ぬときはそっとなんの痕跡も残さずに消えていきたいのです』

…そのような思いの人が、私の周りにもやはりいて、そこにどのような背景があるかわからなくとも、そのような願いも、（何かを残したい、という思いと同様に）また素敵だと思います。

さて、みなさんが今描いている地図（経営にしても、新事業づくりにしても、人づくりにしても、組織づくりにしても）は、本当にみなさんが目指したい地図でしょうか？（みなさんの価値観や初心とつながったものでしょうか？）

地図に乗っ取られないように、よくよく注意したいものです。



「共酒」

お酒上手
第12回

真壁 さおり（社会福祉士・コーディネーター／杜の伝言板ゆるる副代表理事）

明治安田生命保険相互会社が、20代～70代の男女5,640人を対象に実施した「健康」に関するアンケート調査の結果が9月に発表されました。

コロナ禍において健康の大切さを実感した影響からか、約3人に1人以上（34.9%）がコロナ5類移行後に「健康への意識が高まった」と答えています。具体的な行動については、昨年までは「手洗い・消毒」など感染対策の割合が最も高かったが、今年は「食事・栄養」「睡眠」「運動」など生活・運動習慣の割合が大幅に増加しています。

運動に関しては、コロナ禍中に健康づくりのため運動を開始した人は約4割（38.4%）でした。そのうち8割以上（85.1%）の人が、コロナ5類移行後も継続しているとの結果が。「ウォーキング・ジョギング等」（92.0%）、「サイクリング」（89.2%）、「ゴルフ」（88.8%）など、ソーシャルディスタンスを意識した運動が人気のようです。

また、コロナ5類移行という大きな社会の変化にともないストレスの増減に影響したと答えた人は約3割（28.4%）でした。ストレスが増えた人が15.3%、逆に減った人が13.1%。増えた人も減った人もどちらも「人と会う機会が増えたから」という理由が一番多いという興味深い結果が出ています。

個人的に、ストレスが増えた理由で気になるのが、特に20代男性・50代男性で、「会食・飲み会が増えたから」と回答した割合が他の年代より高かったことです。同僚、上司や部下、取引先など仕事関連の飲み会・会食が増えてきたことが、若手社員・上司世代のストレスに繋がっているようです。

誰かと一緒に食事をするを指す「共食」は、心身の健康づくりに効果があると言われています。栄養バランスが改善されたり咀嚼が増えたりして食生活が健康的になるし、コミュニケーションが活性化され、孤独感やストレスを減らす効果もあります。皆さんも、一人で食事をするよりは、誰かと共に会話しながら食事をする楽しい、美味しいと感じたことがあるのではないのでしょうか。

「共食」が心身の健康につながるのであれば、「共酒」も健康的な職場の環境づくりにつながるはず！売り上げや成果・生産性の話ばかりしたり、職場の上下関係をそのまま持ち込んだりするような場ではなく、お互いの人となりを知るような会話や、趣味や得意なことを聞き合うようなコミュニケーションの場にしていきたいものです。

楽しい「共酒」、再開しませんか？



■編集・発行

認定特定非営利活動法人 杜の伝言板ゆるる

〒983-0852

宮城県仙台市宮城野区榴岡 3-11-6 コーポラス島田 B6

TEL 022-791-9323

FAX 022-791-9327

MAIL npo@yururu.com



HP



Facebook